窓の外に見える校庭はいかにも暑そうだった。影が濃い。その中でも運動部が練習している。走り込みの掛け声がする。かあんと、野球部から突き抜けるような音。

埃っぽい本を数冊抱えたまま、ぼんやりと眺めた。

「おーい、あれ、小野どこ？　おーい、妹子ー？」

この声の遠さから言って太子は棚三つほど向こうか。

振り返りもせず返事もせずに、ぼんやりと窓の外を見る。

北棟にある社会科の資料室は冬は寒いけど夏は涼しい。外の暑さに比べたらよっぽど楽で、しばらくはここにこもっていたいと思う。

「おーい、聞こえてるのかこのオタンコナス！」

足音が近付いたから太子が僕を見つけた事だってわかっていた。

怒った声、ゆっくり振り返ると、見慣れた青いジャージがそこにいる。

「呼んだじゃん！　聞こえてんなら返事しろよ！　ちゃんと手伝えよ！」

その本むこうだから、と太子が手招きをする。

今度は素直にそれについていく。

「妹子はたまにぼーっとするよな。授業中とか」

「それはあんたの話がつまらないから」

「はっきり言うなよ！」

優秀だからっていい気になりやがって、とぶつぶつと太子が言っている。そうか、優秀だとは、思ってもらえていたわけだ。

今は太子に頼まれて資料室の整理の手伝いをしていた。

なるほど、こんな人でもきちんと先生なのだと思い出す瞬間だ。

太子は社会科の日本史の教師。

僕は生徒でこの人に学ぶ立場で。

だからといって資料整理の手伝いをする義務なんてない。正直言って面倒だとも思った。

けれどそれ以上に僕が頼まれた、という事実の方が重要だった。

だから僕は受験生の、貴重な勉強時間を削って放課後、この人の手伝いをしているのだ。

とはいっても、受験生という漠然とした焦りはあるもののまだそこまでの危機感を持てているわけではない。

夏休みは一週間先だ。一学期の定期試験はすべて終わっている。

ちょっとした休憩の期間だった。どうせ夏休みになれば山のような塾の講習の日程が待っている。
夏休みになったらがんばるから、だから今ちょっとだけ休憩。
そう考えているのは僕だけじゃなくて、例えば友達の藤田とかも、大体同じようなことを言っていた。
勉強から逃げているといわれればそれまでで、中にはちゃんと今から気を張って勉強に打ち込んでいる友達もいたけれど。
運動部にとってはこれが最後の夏だ。野球部の副部長の平田はレギュラーでがんばっている。さっきも校庭で走り込みをしているのが見えた。練習にも力が入っていて、僕も大会には応援に行くつもりだった。

「じゃあ今度、これ頼む」

抱えた本を棚へ押し込むと、今度はこの部屋にひとつしかない作業用の机のところで太子が僕を呼ぶ。
僕は頼まれるままに、雑多に積み上げられた地図資料の選別と手入れに取りかかった。

それから二時間くらいかけて片付けは終わった。
太子が飲み物をおごってくれるというのでありがたくご馳走になることにして、資料室で大人しく待っている。
することもない僕はなんとなくまた窓際に立ち、校庭の様子を眺めた。
夕日が色濃く影を伸ばしている。夏の日は長くて、暗くなりきるにはまだ時間がある。野球部はまだ練習をしているみたいだ。きっと、球が見える限りは続けるんだろう。熱心な掛け声がずっとする。
これが最後の大会だから。
平田が言っていたのを思い出した。

それでふっと、突然に、自分の気持ちが見えてしまった。

胸のあたりにもやもやと、わだかまっている感覚が、ここのところずっとあった。
焦りとも苛立ちとも違うのにひどく似ていて落ち着かない、ずっと頭を占めている気持ちの正体が突然に。
思わず苦笑する。
ため息のよりはほんの少し勢いをつけて息を吐き出し、天井を見上げた。
きっと僕はさみしいんだと、なんとなく、自分の気持ちが

見えてしまった。

がらがらと戸を開けて太子が帰って来る。
ほら、と放り投げられた缶を両手で受け止めた。
立ちっぱなしのまま二人、並んで棚に寄りかかってそれぞれ缶を開けた。
僕がコーヒーで先生はコーラ。
普通逆だろうと、ツッコミを入れる代わりに別の言葉を口にした。

「太子は」
「うん？」
「さみしいとか、思ったりしますか」

それだけで僕が何を言いたいのかわかってくれたようだった。
少し間をおいて、太子が笑った。
「そうだなー。みんな卒業しちゃうとやっぱりさみしいよな」
「僕は？」
「え？」
「僕がいなくなるのは、さみしいですか」

太子がこちらを見ているのがわかったけど、僕は太子の顔を見られなかった。
缶コーヒーを両手で持ったまま、何となくうつむいている。

「さみしいよ。当然じゃん」

さっきと同じ調子の声だった。
ため息が出た。
それでももう気付かない振りも、我慢することも、僕は嫌だった。

もう一秒だって待ちたくはない。
どうせ残された時間は限られている。
このまま夏休みを迎えればしばらくは会えない。二学期、三学期と、受験生の時間というものはどうやって流れていくのかなんて、想像しかできないがきっとあっという間だろう。
あっという間に時間は経って、僕はこの学校を出ていく。
ためらっているこの間にも、少しずつ、少しずつ時間はなくなっていく。

コーヒーを飲み干して、空の缶を手近な机の上に置いた。
太子の正面に立つ。何も知らない太子は不思議そうに僕を見ている。
生徒の一人を見るその視線が今は何よりも苦しくて、悔しい。

だから手のひらで目隠しをして、炭酸の甘い味のする口に、ぶつけるようなキスをした。

「僕は、」

どうしてこんなに胸が苦しいのだろう。呼吸がままならない、心臓が痛くてどうしようもない。

「あんたに会えなくなるのは、さみしいです」

忘れられることが何よりこわい。
でも、今のでわかってしまった。

太子の中で僕は特別でも何でもない、ただの生徒の一人なんだと。

そのまま固まってしまった太子を置き去りに、コーヒーご馳走様でしたと頭を下げて、自分のカバンと空の缶をつかんで資料室を飛び出した。
僕はふられるんだろうなとわかったその日、まだ暑い夕暮れの中をひたすら走った。

いわゆる帰宅部だった僕は放課後、バイトに行くか、そうじゃなければ学校の適当な場所で時間を潰すのが主だった。
親は共働きで家に帰れば一人だ。小さい頃、それこそ小学生の頃から鍵っ子で、一人の家には慣れていた。
それでもできる限り学校に留まり続けたのは、放課後のどこか閑散とした雰囲気が単純に好きだったからだ。
教室が空いていれば教室に。女子が集まって話をしているのならば図書室に。
たまには友達に誘われて部室にお邪魔させてもらうこともあった。色んな部活が見れて僕としては楽しかった。友達は皆部活に勧誘するものの、週の半分はバイトに当てている僕に無理強いはしないでくれて、その気遣いもうれしかった。
そんな中でも特に気に入っている場所があった。
机もないし、イスもない。だから勉強の予習にはむかない、かわりに寝転がったり本を読んだり、何より学校を見渡すには最適な場所。
本当は立ち入り禁止のその場所の、鍵が壊れていることに気付いたのは偶然だし運が良かった。
おかげで僕はその場所を独り占め、以来、天気の良い日はこっそりと、誰にも気付かれないように足を運んでいた。

誰にも秘密にしていたその場所は、僕にとっての特別だった。
太子に初めて会ったのは授業中。二年の最初の日本史の授業。
それでも太子と初めて話をしたのは、そんな特別な場所だった。

僕は図書室で本を借りてから屋上に向かった。天気のいい日だったから読書にはちょうどいいと思った。
鍵の壊れた扉を押し開けて、屋上に出た。
春の心地良い風がぶつかった。風の抵抗に扉は重たかった。体をすり抜けさせてすぐに手を離すと、扉は勢いよく閉まった。音に思わず首をすくめた。もう少していねいに閉めた方がよかったかもしれない。

扉を見つめてため息をつき、カバンをかけなおして振り向いたところでぴたりと足を止めた。

「……え？」

人が、いた。

豪快に、両手両足を大の字に広げて誰かが寝転がっていた。びっくりした。屋上で他の人に会ったのは初めてだった。でも考えてみれば不思議なことではない。鍵が壊れているおかげで僕だって入れたんだ。他の人がそれを見つけていてもなんの不思議もない。

ただ少し残念なだけだった。ここを知っていたのは僕だけではない。

そろそろと足音を立てずに寝転がった人に近寄った。制服を着ていなかった。ジャージ姿だ。学校指定のものじゃない。

その人は僕がすぐそばにかがみこんで顔を覗き込んでも、目を開かなかった。

もしかしたら寝ているのかもしれない。

そしてこの学校で、こんな色のジャージを着ているといったら、ただ一人。

「厩戸先生」

社会科の日本史教師。

二年生になって僕も授業を受け持ってもらっているから知っていた。先生の授業の板書は滅茶苦茶。字は汚いしすぐに脱線する、ぐちゃぐちゃとでたらめに書き足していくものだからノートをとることを諦める生徒がほとんどだ。そのことをわかっているのか、めずらしくノート提出をさせない先生だった。

板書がわかりづらいかわりなのかどうか、先生の話はわかりやすかった。説明も整然としていて、むしろ話していることをノートに取ったほうがよっぽど役に立つ。僕はそうしていた。聞き取ったことをそのままノートに書き取っていた。

ただ聞いているだけでもこの人の授業は面白いのだ。それなのになんであんな滅茶苦茶な板書ができるのか、そのほうが理解できないくらいに。

先生は目を覚まさない。僕はどうしたものかと少し悩んだ。人がいるなら今日はここを諦めようか。なんとなく、他に人がいると居心地が悪い。

先生は胸の上に教科書を広げていた。授業の予習かなにかだろうか。先生も予習なんてするのだろうか。予習をしていてあの板書なのだろうか。とりあえず何かにつけてカレーの話をするのはやめたほうがいいと思った。おかげで先生の試験では、わからない箇所はカレーの作り方で埋めておけばいい点が取れるなんていう噂が流れていた。

僕は教科書を取り上げてぺらぺらとめくった。勝手に風にあおられたとも言う。落書きでいっぱいかと思いきや、意外にきれいな教科書だった。先生に対して抱く感想としてはおかしいと僕自身も思ったけど。

最後のページには勢いのある乱雑な字で名前が書かれていた。
それを見て僕は、初めてこの人の下の名前を知った。
「厩戸……太子」
「呼んだ？」
「え？　うわあ！？」
気付いたらにやにやとした笑い顔が目の前にあって、僕は本気で驚いて思わずバランスを崩してしりもちをついた。
いつの間にか体を起こしていた先生が、にやにやと僕を見ていた。人が悪い。起きたなら声をかけてくれればいいのに。
不機嫌を隠すことなく睨みつけても、先生は笑ったままだった。
「すまん、小野が熱心に教科書見てるからさ。なになに、なんか質問でも？
今なら出血大サービス、何でも答えてやるから覚悟しろ！」
「……特に何もないんですけど」
「なんだと！？　つまらない奴だなー。じゃあ罰ゲームな。何もないなら、代わりに私のこと名前で呼べ！！」
「……はあ！？」
無茶苦茶だ、思って、思わず声が大きくなった。しまった、先生相手に。いやでも変なこと言い出したのはこの人が先だし、なんだかあんまり気にしてないみたいだし。
ていうかなんなんだ、この人。
全身の毛が逆立つんじゃないかってくらいの勢いで先生を睨みつけても、いっこうに効果がないのが僕を落ち着かなくさせた。
「私生徒に名前で呼んでもらうのが夢なんだよな。ねえねえ、だから頼むよ妹子ー」
そうやって甘えるみたいに言ってきて、ついでに擦り寄ってくるのが気持ち悪くてずりずりと、しりもちをついたままなんとか後ずさった。あ、ひどいそれ傷付く。言葉のわりに楽しげに言って先生が笑う。
「どうした妹子」
「名前」
「名前？　だってそうやって呼んでほしいんだったら、相手にも同じようにするべきだろ？　ちがう？」
「やめてください、なんか、僕が先生と親しいみたいじゃないですか」
「ちょ、私と親しいと何か問題があるわけ？　っていうかその顔やめろ心底嫌そうな目で私を見るな！！」
「うわあこっちくんな！　わああべたべたする、顔近付けてこないでください！　……もうぅ～なんか臭い！　よく

わかんないけどとにかく臭い！」
「お前……人が気にしてることを容赦なくずけずけ言いやがって！！　もう知らん！　絶対に名前で呼ばせてやる！！　うりゃあ～～～！！」
「変なポーズで突っ込んで来ないでくださいぃ～！！」
「ぎゃああ目は止めろ、目は！！」

ぎゃあぎゃあと、相手が教師だとか自分は生徒なのだとかそういうことを、何もかも忘れて大人気なく僕らは騒いだ。

「るっせー！！」

腹の底から出した怒鳴り声が青空の下に響き渡った。

そんな感じで数十分間、必死の攻防を繰り広げてお互い息も絶え絶えだった。
一時休戦ということで、お互い適当に距離をとって、座り込んでへばっていた。
思うがこの人は本当に教師なのだろうか？　生徒に全力で攻撃してくるこの大人が？
しかもどちらかといえば常に僕が優勢だったし。
ただし妙に打たれ強いせいで勝利には至らなかったけれど。
……って言うかなんだ、僕たちは戦っていたのか。
なんだか何をしていたのかさえも忘れてしまった。心底疲れた。なんかもう、何もかもがどうでもいい気さえしてくる。
ちらりと横目で見やると、太子は半べそをかきながら膝を抱えてあからさまにいじけていた。
大の大人が生徒なんかに泣かされるなと言いたい。子供みたいにいじけるなと言ってやりたい。

「うううう……妹子がいじめる……もう嫌だもう生きているのがつらい……」
「太子……今のでわかりました、あんた本当に弱いんですから、生徒に負けたくらいでいちいち落ち込まないでください」
「黙れ私は負けてなんかない、ただちょっと休憩しているだけ……あ」
「え」
「名前！」

膝を抱えていた先生が突然、顔をあげて弾かれたように詰め寄ってきた。
げ、ともう遠慮の欠片もなく声を漏らし、両手を突き出してこれ以上近づくなというポーズを明確に全身で表現してみた。
効果はなかった。

「いーもーこー！　お前実はいいやつなんだろ！」
「は、はなせっ！　コラ、わ、なんでだよ！　なんでこんなときばっかりそんなに力強いんだよ！？」
「はっはっはー！　やったぜ！　ぱっひょ～い！」
「変な歓声をあげるなぁぁぁあ！！」

突き出した両腕ごといっしょくたに、ぎゅうぎゅうと抱き締められて息苦しささえ感じた。暑苦しいしおまけになんのにおいかわからないけどとにかく臭いし、最悪だ。
こいつ本当に教師だろうか。
ぎゃあぎゃあと騒ぎ合いながら僕は、屋上に来てからあまり時間も経っていないはずなのにもう何度目になるかもわからないそんな疑問を持て余した。

やさしくなんかない。僕はきっと人並み程度にはお人よしで、人並み程度には冷たいはずだ。
そんな風に真っ直ぐに、僕のことを評価しないでほしい。
膝に顔をめり込ませる、あからさまにいじけたポーズが心底うざかった。
そして僕も疲れていて、なんだか何もかもがどうでもいいような、そんな気分になっていたのだ。ただそれだけだ。
多分絶対、それだけだ。

そうじゃなきゃ、誰が名前なんて呼ぶもんか。

「わかりました、わかりましたよ。他に誰もいないところぐらいでならあんたのこと、名前で呼んでやってもいいですよ。……それでいいですか？」
「なにこの子……生徒のくせに上からガンガンくるんだけど」

「気のせいじゃないですか？」
「気のせいな訳あるか！」

調子に乗って抱きついてきた教師を何とか力任せに引きはがし、人の嫌がることをしてはいけませんと、説教のために正座をさせて色々と文句をぶつけたあとに、最終的に僕はそう口にしていた。
まさに叱られた子供状態の先生は、まるで本当の子供のように頬を膨らませ唇を尖らせている。
それでも次の瞬間には、一転してため息をつくように微笑んだ。
手をひらめかせるように、簡単に、一瞬でまるで大人みたいに落ち着いたような笑い方で。

「呼んで」
「……え？」
「今。ほら、他に人いないだろ」

な？　ってうれしそうに見つめられて、なぜかどくりと心臓が跳ねた。
びっくりして息をのむ。なぜだかゆるゆると頬が熱い。
顔だけじゃない、いつの間にか、体中が。
自分のそんな反応に戸惑って何も言えないでいると先生は勢いよく立ち上がった。
ほらって、声を弾ませて長い腕を広げて見せた。

促されるように僕は、そっと口を開いていた。

「……太子」
「おおっ、なんかいい響き！　もう一回！」
「太子」
「もういっかい」
「太子！」
「妹子！！」

そして思わず右腕が伸びていた。
はっとすると、足元に殴られた腹を抱えてうずくまる先生がいた。

「……妹子、お前……」
「た、太子が何回も呼ばせるから！　ああもういちいちぶっ倒れるの止めてください悪いことした気になるでしょう！？」
「いやお前、普通に考えて人殴るの悪いことだから。絶対にそうだから」

仕方なく僕は、倒れこんだ先生を立ち上がらせようと手を差し出した。
先生は僕の手を不思議そうにまじまじと見つめたあとにまたふっと、大人らしい静かな笑い方をして、僕の手を掴んだ。
ぐっと力を込めてひっぱりあげた。先生はくるりとその場で回って、ジャージのズボンをばたばたとはたいた。

「ところで妹子。屋上は本当は立ち入り禁止なんだぞ。チクるぞ」
「う……、このタイミングは読めなかった……今それを言いますか。それじゃあんたこそどうなんですか？　ダメでしょ」
「それは、ほら、私教師だし？」
「理由になってません」
「うう……手厳しいなお前……。じゃあこうしよう。二人だけの秘密だ。な？」
「な、って。先に脅したのはあんたの方ですよ。チクるって、そんな子供じゃないんだから」
「まーまー。いいからいいから」

すい、と差し出される小指に自然に指を絡めている自分に驚いた。
なんだか随分、こいつのいいように流されてしまっているような気がする。

「指切った！」

ゆらゆら、ゆらされた小指がすぐに解放された。
先生は本当に楽しそうだ。今度は子供みたいに、全力で真っ直ぐに笑っていた。

こんな大人がいるんだろうか。こんな、まるで子供みたいな。
しげしげと見つめる先で、先生はにやりと目を細めた。
「じゃあまたね妹子。今度の授業でお前さすから予習完璧にしとけよ」
「はいまた。……ってなんの予告ですかそれ！　ちょっと！？」
「あっはっは」

太子は軽い足取りで扉に向かった。扉が閉まる間際に、ひらひらと手を振って背を向けた。
あっという間だった。
太子が屋上からいなくなってしまった後も、僕は今のはなんだったんだろうかと、長い間呆然と立ち尽すことになった。
「……太子」
ぱっと思い出したのは呼んで、と。僕を見上げてきたあの視線、それから笑った顔。
やっぱり強く心臓が鳴った。じわじわと体が熱くなる。まるでそこから伝染するように気持ちが騒いで、落ち着かなくなる。
僕はどうしてしまったんだろう。
これは一体、なんだろう。

呟いた声は風に吹き飛ばされた。
肌寒さにようやく日が暮れかかってきたことに気付いて、僕も慌てて屋上を出た。
帰る途中、家に帰ってからもずっと、先生のことが頭からはなれない。
……僕は、どうしてしまったんだろう。

余談になるけれどもその後の授業で、宣言どおり僕は当てられて教科書を丸一ページ読まされた。
そんな無茶苦茶あっていいんだろうか。
しかも教科書音読って。あんまり予習いらないし。
なんなんだこの人と、音読を終えてこっそりと、教科書のかげから睨みつけたら笑い返された。
やっぱり真っ直ぐに、気持ちをぶつけてくるような笑い方だった。
楽しそうだった。

「……あれ？」

眠れない、眠れないとごろごろ寝返りをうっていたはずだったけれども、それでも結局どうにかなったらしい。
目を開けたら見慣れた天井があって、部屋はいつの間にか明るかった。

「……」

むくりと体を起こして、時計を見る。まだ目覚ましをかけた時間にも少し早かった。
ぼけっと布団の上で座り込んだまま、夢だったのか、それとも眠れない中での考え事だったのか、とにかく太子と初めて話したときのことをつらつらと回想していた。
思えばあのときから好きだったのかもしれない。なんて。

「……あああああ……」

思いながらも、昨日太子にしたことを思い出して頭を抱えた。

一学期の定期試験の日程も終えて夏休みも目前。終業式を来週に控えた今は答案返却の期間だった。授業は午前で終わってしまうため、みんなどことなく落ち着きがない。
全く別の理由で同じように落ち着かない気分の僕は、そんなことはひた隠しに、窓側の席で頬杖をついて外を見ていた。外は昨日と変わらずいい天気だ。空は青いし雲は白いし。ついでに暑い。夏服の半袖のワイシャツに吹き込む風が唯一の救いだ。風がなくなったらまさに地獄だ。公立高校の教室には、エアコンなんていう贅沢なものはない。

「……小野ー……小野？」
「おい！　お前呼ばれてるぞ」
「え？　……ああ、ごめん」

……本当は気付いていたんだけれど。
僕が太子の声を聞き逃すなんて、そんなことありえない。
ためらった。でも、取りに行かないわけにはいかない。
なんでよりによって今日、日本史の答案返却なんだろ。
……っていうかなんで昨日あんなことをしてしまったんだろう。
もう何度目かもわからない後悔を繰り返して、背中を小突

かれて後ろを振り向く。藤田が早く行けよ、と笑っている。お前寝ぼけてんのか、と。
僕はようやく席を立って、うつむきがちにのろのろと、教室の前に行って太子から答案を受け取った。
思い切って、太子の顔を見る。
目が合った。
太子の目が軽く見開かれる。次に過度の瞬き。
目をそらしたがっているのが良くわかった。視線が頼りなくうろついていた。
ぎりぎりで、視線はそらされない。ぐ、と何かをこらえるように細められた目、もしかしたら顔をしかめられたのかもしれない。
一瞬の間の反応をすべて見た。

「……小野は、相変わらず良くできてたよ。来学期も気を抜かないように」
「……」

そんな風に、教師みたいなことを言う。
その声がいつもよりよそよそしく聞こえたのは僕の気のせいなのか、どうか。
喉元まで何かがせりあがってくる。怒鳴りたいような、衝動。
何を言いたいのかもわからないまま、渡された答案を握りしめて振り切るように後ろを向いた。

数歩進んだあたりでばさりと何か物音。太子の喉に引っかかったような鈍い悲鳴が聞こえて、それからあーあ、と誰かの呆れた声。
僕は背中を向けていたのをいいことに、気づかない振りで席に戻った。イスに座りながら見たら、思った通り太子が答案用紙をばらまいていた。もー何やってるの先生。寝不足ー？　拾うの手伝おうか。教室の前の方の席の人たちが口々に言う。
太子は慌てたように答案を拾う。困っている証拠に眉が情けなく下がっている。
何人かが手伝っていたものの、もう点数見えてるからいいじゃん、と誰かが言い出したのをきっかけにみんなでばらばらに自分の答案を取りに行きはじめた。教卓のまわりはちょっとした人だかりになっていた。

「まったく、しっかりしてほしいよ。テスト用紙なんかぶちまけるなって」

藤田も答案を取ってきたみたいで、席に着きながらそう、本気で怒っていないとわかる少しあきれた口調で話しかけてきた。
そうだねと返す、僕もきっと上の空だった。

「なんか今回難しくなかったか？　小野はどうだったよ」

僕が答える前に、答案用紙を覗き込んできた藤田がうわあと声を上げた。

「満点とか、すごいな」

なあどうやって勉強すればそんなにいい点取れるんだ？聞いてくるのに、たまたまだよと返すのが精一杯だった。

僕はもう窓の外なんか見ていなくて、教室の前、太子のことばかり見ていた。

答案を拾い上げる。どんどん拾っていく手にごめんなと謝る。何か冗談でも言われたのか、うれしそうに笑う。先生それ私の、言われて差し出す。大江はここのところが苦手なのかと一言添えて。

なんとか答案を配り終えた太子が顔を上げた。クラスを見渡して、じゃあテスト返ってきてない人、と聞く。誰も手を上げなかった。

僕は太子をじっと見ていた。

太子の視線が僕のあたりで一度止まった。

視線が交わる。

少なくとも僕にはそう感じられた。

「……じゃ、じゃあ答え配るから。採点間違い見つけたらこの時間中に言えよな。今しか訂正できないからな？」

意識している。

されている。

そう、……思ってももう、どうしようもない。

昨日僕がしたことを、なかったことにはもうできない。

「……」

無理やり視線を太子から引きはがして、じっと雲を睨んでいた。

ため息が出そうで胸が苦しい。

吐き出せない気持ちがつまって、胸のあたりがずっと、重たい。

解答と見比べても間違いは見つけられなかった。

僕はあの日以来、日本史のテストだけは満点をとりつづけていた。

太子、と。名前を呼ぶようになったあの日から。

太子のテストだけは。

僕は太子にほめてほしくて、ずっと、満点をとり続けていた。

「じゃあ今学期はこれでおしまい。また夏休み終わったらな」

チャイムが鳴る。号令。

今日の最後の授業だった。一気に教室が騒がしくなる。学活を終えれば放課後だった。

教室を出て行く太子の姿を目で追った。いつものことだ。

変わったことといえば、今じゃその視線に太子が気付いていることくらい。

教室を出て行く瞬間にまた目が合った。

ぱっとそらされて、僕は置き去りにされたような気分になる。

ごん、と勢いよく机に突っ伏した。額をぶつけて痛かったけど、それで僕の頭が冷めればいいと思った。

「お、おいおい。どうしたんだよ小野、どっか具合悪いのか？」

「……ちょっと」

「なんだ、寝不足？　昨日ずっとゲームしてたとか？　ほどほどにしないとダメだぞ。ゲームは一日一時間だ」

具合。悪いのか、僕は。

「……そうだね」

なんだか起き上がる気力がなくてそのまま、だれた気持ちで学活を過ごした。

たまらなくなって放課後、屋上に走る。

勢いよく扉を開けた先には、教室の窓から見たような、真っ青な空が一面に広がっている。

屋上には誰もいない。

自分が安心しているのかどうかも良くわからなかった。

カバンを足元に放り、柵にもたれる。

柵の上に腕組みをしてあごを乗せた。

日差しは強くてじりじりと、半袖でむきだしの腕に照りつけるけど、時々吹き抜ける風が気持ち良かった。

屋上からは社会科の教員室がよく見える。

窓側の机には誰もいなくて、しばらく待っていると太子が戻ってきた。

ぼんやり眺めて、たまらなくなって顔を伏せた。
柵に背を向けて、ずりずりと背中をすべらせてしゃがみ込む。
もう直に屋上のコンクリートの上に座り込んでしまって、片膝を抱えてため息を吐いた。頭の後ろを柵に押し付けて空を見上げた。
日差しが眩しい。明るすぎて暗く見える。目を細める。涙が滲んで、目をこすった。
「……馬鹿か、本当に、もう」
どうしようもなくって、情けなくって泣けてきそうだ。
ますます情けない。
僕は一体どうしてしまったのか。

太子に初めて会ったのは授業だけど、一対一で、初めてきちんと話をしたのはこの場所だった。
名前の呼び捨ての騒ぎを思い出して、そこから始まる、自分の思い上がりが嫌になる。

名前を呼んで、それだけで親しくなったつもりだったのは僕の方だけだったんだ。
どうして僕だけなんて思ったんだろう。先生はずっと先生なのに。
先生にとって僕は、生徒でしかありえないのに。
もしかしたら僕の前にも、名前を呼び捨てにしてもらうような教え子がいたかもしれない。どうしてかたくなに、僕だけが特別なのだと信じ込んでしまえたのか。
そうだったらいいと思っていたからだ。だからそうじゃない可能性なんか思いつかなかったんだ。
この迂闊さがもうそのまま、僕の気持ちの証明みたいなもんだった。
嫌になる。
本当にもう、自分の思い上がりにへこんでどうしようもない。

好きだ。

思ってどうしようもなくなる、すこんと抜けるように青い空の下。

それが夕日色に変わるまで、とうとう僕は屋上から動くことができなかった。

5

夏休みを目前に控えた校内の雰囲気は、どことなく浮ついていてだらけている。
とはいえそれは下級生の話であり、僕たち受験生はそんなのんきなことを言ってもいられない。塾のパンフレットがちらちらと視界をかすめるたびに気持ちが焦る。講習の日程とかを、いい加減決めなければならない。

「小野は大学どこ行くんだ？　やっぱり余裕なかんじ？」
「まさか、ぎりぎりだよ」
「でも小野は無理だって言わないもんな。うわー、どうしよう俺。なあ俺でもいける大学どっか知らないか？」
「まだ夏休みもあるし、これからだよ。みんなも勉強してくるだろうし……藤田だって、行きたいところはあるんだろ？」
「そりゃあ、気になってるとこはいくつかあるけど……」

藤田はまだ志望校を決めかねているらしい。この夏に、オープンキャンパスで色々と見てまわるそうだ。
休み時間、窓側の前後に並んだ席についたまま、藤田とそんな話をした。
暑いのか、藤田はだらりと机に突っ伏して下敷きで首元をあおいでいる。

藤田が見学に行く予定の大学の候補を聞いて、その中に僕も気になっているところもあったからいっしょに行こうということになった。あとは平田の試合の応援にも。必ず応援に行くからと、この間廊下ですれちがった時に言ったらうれしそうにしていた。

「それにしてもやっぱり嫌だよなー受験生って。一、二年がうらやましくなるぜ」

藤田がだるそうにぼやく。

「夏休みも講習づけで、二学期になったらなおさらだろ？三学期はついに受験だし。そう考えてみると、卒業なんかあっという間だよなあ」
「……そうだね」

少しだけ首をひねって、外を見た。
相変わらずの突き抜けるように青すぎる空。今日は雲すら見当たらないから見た目だけならなおさら暑い。
藤田に気付かれないようにこっそりとため息を落として、授業開始のチャイムを聞いた。

卒業なんかあっという間だ。
太子に会わなくなるのも、あっという間。
その後ひたすら太子を避けながら、僕は自分自身に言い聞かせ続けていた。
この気まずいのもきっとあっという間、きっとすぐに、終わってしまう。
それまで太子と接触しないように、気をつけていればいいだけだ。
きっと太子も、これでいい。僕なんかにまた声をかけられたら、きっとその方が迷惑だ。
廊下ですれ違うときは早足でわきを通り過ぎた。軽くうつむいて絶対に、目が合ったりしないように。
時々引き止めるような、とがめるような視線を感じることがある。うつむいたまま一瞬きつく目をつむり、なかったことにして通り過ぎる。
思い出すのは資料室での僕を見る太子の目だった。
他にもたくさんいる生徒のうちの一人。
当たり前だ、太子は教師で、僕は生徒なのだから。
何も間違いはない。
ない、のに。
相変わらず胸が、痛い。

治まるどころかどんどんとひどくなってくる、この痛みの方がよっぽど間違いなのに。
角を曲がるときに少しだけ歩調をゆるめて、太子の後ろ姿を見送った。青いジャージの後ろ姿。声をかけられて振り返る。
笑っている。
僕だってひとりの生徒として、距離を保つこともできたのに。そうすればこんな痛みなんか知らずに、ああやって、笑いかけてもらうこともできたはずなのに。
……どうしよう。痛い、苦しい。
つらくて、悔しい。
早くどうでもよくなればいいのに。
ため息だって出そうになかった。

終業式は体育館絵行われた。ひそひそとしゃべり声がするのはきっと、友達同士で休みの約束の確認でもしているんだろう。僕は早く終わればいいとそれだけを思って欠伸をかみ殺した。

ここのところ良く眠れていない。原因はわかりやすすぎてへこみそうだ。
終業式の終わりの挨拶とともに、ざわめきがいっそう大きくなる。
体育館は校舎から少し離れている。移動にはたったひとつの渡り廊下を使うしかない。学年別にタイミングをずらすものの、全校集会になるとどうしたって混雑する。
よりによってその移動の混雑の中で、僕は太子に出くわした。
太子はわりと背が高いから遠くからでもすぐ見つかった。さっさと歩いていけばいいのに廊下のはじで立ち止まっている。
なんでそんなとこにいるんだよと、文句を言ってやりたかった。終業式のこの日を乗り切れば当分太子に会わなくてすむ。夏休みは長い。その時間があれば、受験勉強でもしているうちに気持ちの整理もつくと思っていたのに。
台無しだ。
僕は小さく舌打ちをした。苛々する。何とか太子から遠いところを通ろうとしたけど人混みが邪魔でうまくいかない。
だからせめてうつむいて、目を合わせないように、いつものように足早にすれ違おうとした。
一瞬きつく目をつむり、騒ぎ出す胸の痛みをやり過ごす。
握りしめた手のひらに爪が食い込んでそこも痛い。
「妹子」
きっと他の人には聞こえない。
僕にだってぎりぎり届くかどうかの、とても小さな声だった。
息が止まりそうだった。びっくりした拍子に足が止まった。ダメだと、思ったのにとっさに振り返ってしまう。
手首をつかまれていた。ずるいと思った。太子としっかり目が合ってしまう。じっと見つめてくる視線を、睨み返す。きっと表情は歪んでいる。怒りたいのか泣きたいのか、悔しいのか苦しいのか。
一瞬で気持ちがかき乱されてどうしようもない。
ずるいと、思った。
そんな風に呼び止められて、僕が無視できるはずがない。
太子はすぐに手を離したけど、とっさに反応できない。後ろを歩いてた人が僕にぶつかった。迷惑そうに避けていくのを視界の端で確認して、それでも僕は立ち止まったまま動けない。
呆然と立ちすくむ僕の手をまたとって、太子が折りたたんだ紙を押し付けた。
「放課後また、お願い」
太子はそれだけを小さな声で一方的に告げて、さっさと人並みに紛れていなくなってしまった。
僕は紙切れをにぎりしめたまま、動けないでいると背中を

たたかれて思わず悲鳴を上げそうになった。
「小野こんなとこでぼーっとして何やってんだ？」
藤田だった。それでようやく、僕もいっしょに歩き出すことができた。
「でさ、平田の試合だけど、ケンジもいっしょに行くって言い出してさ。小野ってケンジ知ってたっけ？　あいつ一組だから体育の授業いっしょだったんだけど。それで……」
藤田の話を上の空に聞きながら、相づちを打つのが精一杯だった。
どうして、太子の方から。放課後。お願い？
混乱した頭が働かない。押し付けられたメモを思い出して、でもなかなか開く勇気が出なかった。

『アホの妹子へ
資料室の掃除の続きをするから、手伝え
有無は言わせないからな、覚悟しろよ！！』

「……覚悟って」
いよいよ僕はふられるんだろうか。
あの日置き去りにして聞かなかった、聞きたくなかった答えを、突きつけられるのか。
「……おーい、小野ー？　なにお前また具合悪いのか？」
ああもうここのところずっと藤田に心配かけている。
「……ごめん、ありがとう」
本当に情けない気持ちでそれでも何とか通知表を受けとって、確認する気力もなくそのままカバンに押し込んだ。
「じゃあまたな。試合の方はケンジに聞いてみてからまたメ

ールすっから」
「……うん、ケンジ君にもよろしく」
「ケンジでいいと思うぜ。じゃあなー」
そう手を振る藤田に手を振り返して、僕は、
「……どうしよう」
悩んだまま、校内中をうろうろと歩き回っていた。

6

僕は資料室のドアの前に立ち、自分でも大げさだと思うくらい、何回も深呼吸を繰り返してそれでも覚悟を決めきれずにいた。

学活が終わってからもうすでに一時間が経った。校内をぐるぐる歩き続けてようやく、何とか資料室に向かう気力がわいてきた。

教室でずっとおしゃべりを続けていた女子に、何回も姿を見られて不思議そうな顔をされたから、とも言うけれど。

資料室のドアの前に立ってふと思った。そうだ、もしかしたらもう太子はいないかもしれない。だってもう一時間も経っているのだ。もういない確率の方がきっと高い。

嫌われただろうか。嫌われただろうな。だって呼んでも来ないやつなんて。これじゃすっぽかされたのと同じことだ。

でも今さら嫌われたところで別に構わない。だってきっともう嫌われている。これ以上どう嫌われたって別に全然構わないはずだ。

……いや、本当は、本当に、嫌だけど。

嫌なのだ、太子に嫌われるのは。

それをはっきりと言葉で突きつけられてしまったら、僕はもうどうしたらいいんだろう。

「……ああもう……」

だから逃げた。あの日、この部屋から。

太子から。

「もうぅ……」

ぐしゃぐしゃと、髪をかき乱す。爪を立てて、息を止めた。

好きだ。好きで、いつの間にかこんなにも好きでどうしようもない。

嫌われたくなかった。できることなら同じ気持ちを返してほしかった。

そうじゃないなら何も言わず、伝えず、生徒と先生と、そんな関係を保っていられたら一番良かった。

……それは本当のところでは嘘なのだと、ただの強がりでしかないのだと、僕はもう知っている。

だってその関係が嫌だったから、あの日、僕は行動したのだ。

生徒のひとりとして見られるのが嫌だった。

他の誰でもない、僕を、好きになってほしかった。

どうやって伝えたらいいのかわからないくらいに、太子のことが好きだった。

僕はもう、行動してしまった。

取り戻せないことはよく、わかっていた。
ドアに手をかける。
息を止めたまま、一気に開いた。

もうきっと誰もいない。
そうでありますようにという僕の願いを裏切ってすんなり開いたドアの先に。
机に突っ伏している太子が、いた。
びっくりして僕はドアを閉めて、何となく鍵までかけてしまう。
いや意味がわからないから。
何してんだ何してんだ、という自分自身に対するツッコミとは裏腹に、ふらふらと吸い寄せられるように僕は太子のそばへ寄った。
ドアを開けた音だって聞こえてただろうにぴくりとも動かない。太子は机の上に突っ伏して、腕を組んだ上に頭をのせていた。
近づくとすーすーと規則正しい呼吸が聞こえてくる。

僕はほっと息を吐き出した。太子は、寝ている。そういえば屋上で会ったときもそうだった。なんとなく、笑えた。それで強ばっていた体から力が抜けた。
寝ているのならばそんなに怖くはない。何を言われることもない。
顔は反対側に向けられていた。ゆっくりと足音を立てないように気をつけて回り込んだ。目をつむって、口がよだれとかたらしそうなくらいに間抜けに空きっぱなしの顔をのぞき込んだ。
そんな緩みきった表情にだって、ぎゅっと胸のあたりが苦しくなった。
気が付けば心臓がバクバクと鳴っている。痛いくらいに。
太子だ。太子がいる。なんだか切ないような気さえして、できるだけゆっくりと息を吐いたら震えていた。
僕は机にそっと片手をついて、身を屈めて太子を覗き込む。
なんでだろう。なんでここにいるのだろう。
終業のチャイムが鳴ってから一時間も経った。
また僕は、この人を置いて逃げようかとさえ思っていたのに。
待っていてくれたんだろうかと、思ってうれしくてたまらなくなり、同時にやっぱり怖くなった。
太子はどういうつもりなのだろう。
起きない寝顔に顔を近づけた。太子の顔に僕の影が落ちる。一週間前の資料整理。炭酸のぬるい甘さは何度も忘れようとしたけれどもまだ鮮明に覚えていた。

思い出してもつらいだけだから一生懸命忘れようとした。思い出さないようにしていた。
それが今、目の前にあるのだと思うとほしくてたまらなくなる。
どきどきする。どきどきして……悲しくなった。
お互いの呼吸だってわかる距離、もうほんの少し、あと少し顔を近づけるだけだ。それだけでもう、キス、できる。
簡単だ。
ひどく簡単なことだったけれど、僕はそこで、止めてしまった。
あきらめる、一方的なのはつらいだけだ。
これ以上一方的に想っていても、後がつらい。
だからこのまま素直に太子を起こすか、それとも知らないふりで帰ってしまうかと。この期に及んでまだ逃げることばかり考える自分が嫌になりつつも、気付かれないうちに顔を離そうとした。
ぎくりと身体がこわばった。

「……え？」

ぱちりと、開かれた目に見つめられていた。
じっと見つめあう。早く離れろと脳は言うのに、身体が動かない。驚いたまま固まって。
動けない。

唇に、やわらかいものが押し当てられる。
中途半端にかがんだ姿勢のまま。唇に温度。少しだけつめたい。薄くてやわらかい。
じっと、ぼけるほどに近い瞳に射抜かれる。
息が止まった。時間だって止まったみたいだ。呼吸ができない。動けない。
何も考えることができない。
何が起きているのか、わかっていて、わからない。
ただ唇に触れる温度を感じる。くらくらと、目眩さえしてきそうで気が遠くなる。
ああもう僕はダメかもしれないと、脈絡もなく思う。
どうしよう。なんだか体がふわふわする。
ゆっくりと太子が離れる、唇をぺろりとなめられて、思わず口元を押さえて後ずさった。
悲鳴は何とか飲み込んだ。
というよりももう本当に驚きすぎて、声だって自由に出てこない。

「あ、何だよそれその反応」

太子が不機嫌そうな顔で言って、突っ伏していた体を起こした。うん、と思い切りよく背伸びをした。
イスに座ったまま、体を僕のほうに向ける。
にやにやと、浮かべているのは意地の悪い楽しそうな笑い

顔だ。

「傷付くなー。初めは、お前の方からだっただろ？」

だから、仕返しだ。太子は目を細めて笑う。胸が苦しい。やめてほしい。偉そうに胸を張っていて、僕はどうしたらいいのかわからないままだ。

「でも今、先生から」

「名前」

「……でも」

「呼べって。そういう約束だろ？　他に誰もいないなら、さ？」

なあ妹子、と。

太子がイスに座って僕を見上げてくる。

いつかと同じように、ほらって、声を弾ませて長い腕を広げて見せて。

ぐっと、眉を寄せる。

体の両脇で手のひらを握りしめて、呼んだ。

「……太子」

「そうそう」

よくできました、と、太子はなんだか楽しそうだ。

「なんでお前はそんなに中途半端なんだよ。こないだだって、なんだあれ、言い逃げ？　なんなの？　そのままほっぽりだすって私どんな放置プレイ？」

「いやあの、その」

嫌いだと言われたら苦しくなる。

困ると言われれば悲しくなる。

だから何回も何回もその様子を思い描いた。本当に言われても傷付かないように。少しでも、痛みが少なくなるように。

そのどちらでもない答えは考えていなかった。

そのどちらでもなくて、からかうように笑われては、僕はどうしたらいいかわからない。

言葉に詰まる僕を、太子が手招く。

迷う。迷って、でももうどうにでもなれと太子に歩み寄った。

正面に立った僕の両手を、太子は握りしめてくる。

「あのなー妹子。お前のせいで私、あれからお前のことばっか考えてるんだぞ」

責任とってよ、と。

言われて、一瞬何を言われたのか意味がわからなくて。

気付いて、体中が熱くなった。
顔とかもう、絶対赤い。
恥ずかしい、でも、もうどうしようもない。
「私はお前のことが気になって仕方ないんだ。だからこのまま、もっともっと、お前のこと好きにならせてよ」
イスに座ったまんまそうやって、僕を見上げてくる太子を、僕は信じられない思いで見つめていた。

「なあ、私の気持ちは言ったけどさ、私、お前の気持ちは聞いてないんだけど」
気が付いたらもう一秒だって待っていられなくって、太子のことを抱きしめていた。
体中が震える。この人は今何て言った？
何回も何回も真っ白になりそうな頭で太子の言葉を再生しては、ぎゅうぎゅうと腕の力を強くする。
ぎゅうぎゅうと、力の加減もできずに抱きついて、妹子苦しい、耳元で笑う声にますます歯止めが利かなくなる。
どうしよう。どうしよう。どうしよう。どうしよう。
何か奇跡でも起きているんじゃないのか。これは夢とか。だとしたらなんていい夢なんだろう。
それならもう、醒めなければいいと思う。
胸が苦しくて、鼻の奥が痛い。
泣いてしまいそうなんだって思って、ますます抱きしめたまま離れられない。

震える呼吸を飲み込んだ。
きつく抱きしめたまま目をつむって、祈るような気持ちで想いを口にする。
聞いてください、と。震える声を何とか、繋げて。

「僕はずっと、あんたのことが……」

キスしたいって正直に伝えたら、何て答えてくれるだろう。
泣き笑いのまま額を合わせて見つめてみたら、おんなじ笑い顔がむかえてくれた。